

---

Snow Queen **【雪の女王】**

くろぬこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Snow Queen 【雪の女王】

### 【Nコード】

N6854S

### 【作者名】

くろぬこ

### 【あらすじ】

嘗て明けの明星と謳われた天使シャヘル…。

神に再び愛されようという期待を込めて作られた悪魔の鏡…。

その期待は打ち砕かれて、神に愛されている『人』へと向けられる呪いとなる…。

祝福された少年カイの幸せな日々は護られるのだろうか…？

## 第1章　嫉妬

初めに光があった…。

そして闇が生まれ、神の衣の裾から零れ落ちた獣が、地に堕ちた者が、神の住まいし、大聖堂の十字架を止まり木として居る。

まるで大きな群れぬ鴉の様に、黒い翼をたたみ、静かに俯いている。

黒い獣は両の腕でしっかりと、その胸に何かを抱えている。

俯いていた顔を上げて空に広がる青白い大きな月を見上げる。

「月よ・・・。嘗て明<sup>かつ</sup>けの明星と呼ばれ、今、地を這う我を、そなたは覚えているか？そなたに我はどう見えているのか…。獣<sup>たてがみ</sup>の鬣<sup>は</sup>の様に、たなびくこの黒い髪。黒く鋭い爪。闇に染まった翼。我は最早<sup>はや</sup>、禍々しい獣である…。

光を運ぶものとして、太陽の誕生を告げ、あの方に最も近く在った我を…お前は覚えているのか。」

嘗て、神に近く、神に最も愛されていたという、天に生まれ、今は地を這う獣は、じつと月を見つめる。

応えを待つかのように…。

そして、いつものように深いため息をつく。

「誰よりも愛されたいという願いは、叶えられる事無く、雷<sup>いかずち</sup>となつて我に降り注いだ。何故、何時までもお怒りは解けぬのだ。ほんの刹那<sup>ただ</sup>、唯、もう一度、其の刹那だけでも、美しくあの方の御前に、瞳に、この姿が映れば…」

だから其の鏡は作られた。幾千の昼、幾億の夜を超え、刹那の願いをこめ、作り上げられた。胸に抱く金で縁取<sup>ふちと</sup>られた鏡は、そっと胸から解き放たれ、其の表に月の光を受ける。

「これで・・・仕上げだ。今宵この満月の光を受け、我が鏡は出来上がった。真っ直ぐな物は歪み、美しいものは醜く…。醜いものは美しく映るのだろうか…。」

そうして出来上がった【鏡】を、再び胸に抱きしめ、天への階段を上るために、飛び立つ。

だが、禁じられた道程みちのりであるその階段を上る度に、ひと踏み、ひと踏みする度に

獣の足は血を流す。

「神の怒りに比べれば、痛みなど、どれ程のものか。後もう一息、数段ではないか。

何度このときを夢見た事か。地の底で魔と呼ばれ、哀れな我が従者達と共に、

見続けてきた刹那の夢を今こそ叶えようぞ。」

フィンランド・カイとゲルダの住む街。

教会の鐘の音が鳴り響く中、大聖堂のミサを終えて家に帰ろうとするカイを見つけゲルダは声をかける。

「カイ！」

「ゲルダ。良いミサだったね」

「一緒に帰ろう」

「そうだね」

幼馴染の少年と少女は、仲良く連れ立って歩いてゆく。

少年の名は、カイ。

信心深く、賢く思いやりに溢れている彼は、街中の者が「神に愛されて生まれてきたのだ」と信じて疑わなかった。

とりわけ、その声は天使のようで、ミサの折、望まれて聖歌隊でそ

の美しい歌声を神に捧げていた。  
幼い時に、事故で両親を亡くし、今は残された財産で祖母と静かに暮らしている。

優しい彼は穏やかな祖母との静かな暮らしをととても気に入っている。

そして、銀色の髪を風になびかせるカイの横顔を、時折見ては頬を赤らめている少女の名は、ゲルダ。

物心ついた頃から母と二人暮らしであったが、その母も今年の春に亡くし、一人暮らしを余儀なくされている。心細くはあったが、小さい頃から良く遊んでいたカイが何かと世話を焼いてくれた。  
ゲルダは、母の亡くなった春に18歳に、そしてカイは冬には18歳になるうとしていた。

「聖歌隊お疲れ様」

「ありがとう」

「カイのソロがとても素敵だった。すごく上手だった、私もあんなふうに歌えたらなあ…」

「ありがとう。でも、僕はそれほど上手ではないし、ゲルダの歌も僕は好きだよ」

「うっん、私はカイの歌が好き！ 私はただ、一生懸命歌っているだけだよ」

「大切な事だと思うよ。讃美歌は神様を讃える歌だし、普段は自分が楽しく歌えればいいと思う。」

ゲルダは、歌が好きかい？」

「え？…私は…。好きだよ。歌が好き。」

カイと歌っていると、とても楽しいし、カイの歌を聴くのがすき。

「あはは、照れくさいな。」

でもゲルダの、そうやって好き！と言えるところ、一生懸命なと

ころ、凄いなって思うよ」

「えへへ…そうかな…。あり…がと」

しばらく行くと、遠くから犬がしきりに吠え立てているのが聞こえた。

「犬が…？ どうしたんだろうね」

「何か居るのかな…。猫の子供でも迷い込んでいるのかな？」

そっぴいなから、カイは犬のほうへと近づいてゆく。心配そうにその後ろからついて行くゲルダ。

「気をつけてね、野良犬みたいだし…」

「大丈夫だよ、あの犬なら知っているんだ。たまにうちの庭に遊びに来るからね」

「ふうん…。でも気をつけてね、凄く吠えてるもの…」

「よしよし、どうしたんだい？」

ゆっくりと近づきながら犬に優しく声をかけると、犬は顔見知りのかれに気がついて吠えるのをやめ嬉しそうに尾を振っている。「おいで…」そう言われて犬はカイに近づき、尾を垂れて頭を差し出す。「良い子だね。どうしたんだい？ いつもはもっと、おりこうだろ？」

ゲルダは、その背中に張り付くようにしてカイの肩越しに犬を見ている。

「カイ？」

「大丈夫…。」

おびえた様子のゲルダにそっぴいなから、カイは犬が吠えていたあたりを覗き込む。

其のあぜ道には、イラクサがみっしりと、生い茂り、ちようど犬の吠えていたあたりで時折ガサガサと葉が震えている。

それに気づいたカイは少しだけ声を潜める。

「イラクサの茂みに何か居るみたいだ…」

「イラクサ?! 触っちゃだめよ!? カイ」

「わかつている。大丈夫…」

「だめよ! アナタ小さいときもかぶれたじゃない!」

「あはは、もう大丈夫だよ」

イラクサの茂みを掻き分けて覗いて見ると、何か小さな生き物がうずくまっていた。

「鳩だ…」

潜めた声でゆつくりと…。だが、まるで宝物を見つけたようなカイの声に誘われて背伸びをして覗こうとするが、ゲルダにはそれが見えない…。其処でそつと尋ねる…。

「ハト?」

「うん、白い…鳩だよ。」

ん? 怪我をしている、タベの吹雪で落ちたのかな。

イラクサのおかげで命拾いしたね」

イラクサは、葉や茎に棘のようなものがあり、触れれば其れは、ちくちくと手足を傷つけ、痛い。

犬や猫は其れを嫌い近づく事はない。血の臭いに惹かれてきたとしても、手を出す事はないのだ。

生い茂るイラクサを掻き分ける度に、カイの白い指や腕に傷が付いていくのをゲルダはとても嫌だった。

まだ、小さいときに遊んでいてイラクサの茂みに倒れたカイは、顔や手足にたくさん傷だけではなく湿疹ができた。

其のときのカイの姿を、もう見たくないとゲルダは思った。

気にすることなく茂みに手を入れるカイの背中でゲルダは少しだけ眉をひそめた。

カイはゆつくりと手をいれると、その手の中に包み込み茂みの中から鳩を出してやる。

「怖くないよ…。ああ、やっぱり怪我をしていたんだね。

おいで…。さあ…。イラクサの中に落ちて助かったね…」

「本当！血が…！」

抱えられて震えている鳩に、再び犬がワンワンと吠え立てる。

「しいつ。怖がらせないで、吠えたらいけないよ？」

いつも優しい少年に、穏やかに注意されて犬はしょんぼりとした声を出す。

「く〜ん…」

先ほどとは打って変わって、可愛い声を出す犬に少年は優しく微笑むと今度は鳩の頭を指で丁寧そつと撫でてやる。

「君はなかなか、賢い鳩くんなのかな、それとも、神様が君をイラクサに隠してくださったのかな…？」

「ねえ、血が…服に…。っ！ カイ！？やっぱり腕が赤くなっている！湿疹ができているよ！？」

「ん、ああ。大丈夫、これくらい。すぐに消えてしまうよ。それに血だって洗えば大丈夫。

寒いのかな…怯えているのかな…？震えている。そうだ…」

カイは片手で自分が巻いていた青いマフラーをはずすと、血を流し、震えている鳩にふんわりとかけてやった。

「良いなあ…。カイのマフラーでくるんでもらって…」

「こうやってくるんであげれば、安心するからね」

「私の家ですぐに手を洗ったほうがいいよ？」

「平気だって、もう小さな子供じゃないからね。ゲルダは心配性だな。君もそう思うだろ？」

少しだけおどけた口調で鳩に向かって話しているカイに、ゲルダは少し悲しくなってしまう。

カイの手が、顔が、またまるで苺のように赤く発疹するのを見たくないのに…。

「だめよ！もう、腕にいつぱい傷も…。だから言っただに…！」

消毒しなきゃ…そう言いかけた少女の目に涙がにじむのを見て

「ごめん、ごめん。じゃあ、寄らせてもらおうかな。ね、鳩くん？」  
もう一度おどけた調子で話して見せる。

今泣きべそを書いていた少女は

「うん！良かった、行こう？」と鳩を抱える少年の腕に自分の腕を絡ませる。

ほんの少し、頬を赤らめながら…。

同年の幼馴染達は寂しさからか、または違う想いからなのか…。そんなふうにお互いの家を行き来する事は少なくは無かった。

ゲルダの家に着くと、すぐにカイの手を丁寧に何度も洗うゲルダ。まるで赤子を沐浴させるように、もういいよと少年が照れても、何度も、何度も、丁寧に湯をかけ、優しく、くるむようにタオルでしっかりと拭く。それから、乾いた手にこれもまた丁寧に薬を塗ってやりしばらくその、細く長いしなやかな白い指に見とれている…。

「…ゲルダ？」

「さあ、これでよし。早めによく洗ったから、すぐに湿疹も消えるかもね」

「ありがとう。湿疹の薬なら家にもまだあるからね。

でも、ほら、もうだいぶ薄くなってきたよ。明日には消えてしまうかも。

鳩くんもだいぶ落ち着いたみたいだし。きっと寒さと、怖さで震えていたんだね。

傷も少しだったし。今はまだ、それほど長くは飛べないかもだけど、羽も無事だし…」

「籠がちょうど良かったね。気持ちよさそうに寝てる…」

鳩は、ゲルダの家の果物籠の中で、暖かいマフラーの心地よさにうとうとしていた

「そうだね。でも、僕のマフラーも気に入ったみたいだよ」少し自慢するように言つと、またゆっくりと鳩の頭を撫でてやる。優しい指の動きに、鳩は穏やかに目を細める。

「いいなあ…。カイのマフラー…」

「ふふ、おかしなゲルダ。男物だよ？」

「だって…」

「そんなに欲しいのなら、前に使っていたマフラーを持ってきてあげようね」

「ええ！？いいの？やったあ！ほんとね？きつとね？」

「そうだね、そんなに喜んでくれたら、マフラーもきつと幸せだね。実はとてもお気に入りで、捨てられなかったものなんだ。おばあ様が編んでくれたんだよ」

「わあい。カイのお気に入りマフラー。おばあ様の手作り。嬉しいな、凄く楽しみ」

「ははは、さて、おばあ様が心配するといけないから、そろそろ帰るよ。」

この籠、借りて行ってもいいかな？」

「もちろん…。でも、鳩の、鳩君の羽はおばあ様のお身体に大丈夫かな…？お咳も出ているんでしょう？」

「羽か…。そうだね…。2階においておけば大丈夫かなって思ったんだけど」

「そんな、鳩くんも可哀相よ？寂しいし…。だからね、私の家に預けていつて…」

「ゲルダ…いいのかい？」

「どうして？私はどうせ一人だし、寂しくなくてとても嬉しいわ」

「そうかい？じゃあ…、毎日来るよ！手伝える事あるかもしれない」

しね」

『毎日来る…』それがどんなにこの少女にとって嬉しい約束だったであろうか…。

「本当！？凄く嬉しい！毎日美味しいお菓子を焼いて待ってる！良かったね、鳩くん！カイがね、毎日来てくれるんだよ？」

「聖歌隊の練習も、しばらく無いからね」

「うん…。ありがとう、カイ」

「どうしたの？ありがとうは僕のほうだね。ありがとう、ゲルダ」

「明日、待ってる…」

「うん。じゃあ、そろそろ…」

「うん、また明日」

「また明日。ゲルダ」

カイは籠の中で眠っている鳩に優しくキスをする。うつすらと鳩は目を開けるが、再びまどろむ。

入り口のドアを出て、扉の前でカイを見送るゲルダ。

庭の小さな柵を開け、もう一度振り返り手を振るカイに、まるで旅立つ者を送るように大きく

何度も手を振るゲルダ。

冷たい冬の空気に、頬を真っ赤にして嬉しそうに手を振るゲルダがとても可愛く思えて、カイはにっこりと微笑む。

そして、今度は振り返らずに家に帰っていった。

其の後姿を、見る事ができなくなるまで外で立っていたゲルダは、暖炉で暖まろうと家に入る。

それからふと思い立ったように、籠でまどろむ鳩にキスをする。そつと…。

まるで、愛する人との初めてのキスのように…。

はとがその唇の感触に目を開けると「ごめん、おこしちゃった？待ってね、水を持ってくるね」そういつてゲルダは小さな入れ物に水

を入れて鳩に持ってきてやった。

鳩は、ククつと小さく鳴くと羽ばたいて少女の肩に乗る。

「わぁ、もう飛べるんだね…！でも、無理しちゃだめだよ？」

でも、肩から降りて？ はい、お水よ。そうだ、何か食べる物を持ってくるから肩から降りてね…」

少女は、小さな鳩をそつと暖炉のそばの床に下ろすと今度はパンくずをさらに入れて持ってきた。

ささやかな佇まいの小さな家の小さな暖炉が、暖かい空気を揺らがせながらパチパチと音を上げている。

「さあ、お腹すいてるよね？パンくずしかないけど、食べてね」

鳩はパンくずをついばみ、水でくちばしを洗うようにしてはチラチラとゲルダの顔を見ている。

少女は小さいお客様の前に座り、楽しそうに話しかける。可愛らしい顔を暖炉の日が柔らに照らす。

「ふふふ、なんだか本当にお話しているみたい。

ねえ？わかつてるかな、アナタを助けたのはカイなんだよ？

綺麗な銀の髪に、澄んだ湖のような蒼い瞳の…。

カイ、覚えてる？

ほら、アナタの大好きなこのマフラー、これはね、カイのなんだよ？温かったでしょう？」

まるで応えるかのように、鳩が小さく鳴く。

すると、少女は指を一本たて、母親が小さい子供に注意をするように…

「自慢したってだめなんだからね、羨ましくなんか無いんだから。

だってね、ふふ明日ね、…私もカイのマフラーもらえるんだよ！

手編みの、カイのお気に入りだよ？凄いでしょ。でもね貸してあげないの。

私がするの」と、おどけてみせる。

鳩はもう一度、小さく鳴く。

「ごめん。だって、嬉しかったんだもん」

ゲルダは立ち上がると、鳩を見ながら、ぽんぽんと自分の肩をたたいてみせる。

「こっちに乗って、いい物見せてあげる」

言われてすぐに、鳩は少女の肩へと羽ばたいてとまる。

「本当に言葉がわかるみたい……。アナタが話せたら、きっと私たち仲の良いお友達になれるね」

鳩が再び小さく鳴く。

「そうだね、もうお友達だね。私とカイと、アナタ…。」

明日ね、カイが来るの。一緒にお話したり、遊べるよ。きっと楽しいよ！」

その家の壁に、絵が飾ってあった。

ゲルダは鳩を肩に乗せて、綺麗な額縁に飾られたその絵に近づくと、絵に向かって指を刺し鳩に尋ねる。

「ねえ、見て、これ、なーんだ？」

「ブブー！残念！これはね、私でしたー！

…えへへ、わかんないよね、私も分からない、きっと誰が見たって気付かないよ？」

この絵に描かれているのが私なんて…」

今度は鳩が応えずとも、少女は話を続ける…。

「そうか…アナタは夜はあまり見えないんだよね…。」

ゴメンゴメン、仕方ないよね。

でもね…。夜じゃなくてもきつと気付かないよ…。

これね、母さんが死んだ時、すぐに私のお誕生日で…。

一人っきりでお祝いしてた時にね、カイが私が寂しくないように

って、自分で描いた私の絵を持ってき てくれたんだ。

中に入らずにそのまま帰っちゃったけど…嬉しかった…。

でもね、これ、私よりも母さんに似てる…。

仕方ないんだ、カイもお父さんお母さん居なくて、おばあちゃん  
とくらしてて、よく遊びにきてたん だ。母さんの焼くスコーン  
が大好きで…。

でね、カイは違うって言うけど、この絵、私より母さんに似てる  
…。

優しくて、綺麗だった母さんに…。

でも嬉しかった！母さんに似ていてもいい！カイが描いてくれた  
んだもの、私のために…！

私も大好きだった、母さん…」

ゲルダは描かれた少女の胸に手を置いて、そつと自分の頬を寄せる。  
「私は母さんの娘だもの、いつかは母さんみたいになれるかも…な  
れるかな…。

なったらきつと、毎日カイにスコーンを焼いてあげるの。

だから私は、母さんみたいに優しい女性になるの…」

鳩がまた、小さく鳴く…。

少女は、目を閉じ、呟く…。

「ありがとう。きつと頑張る…」

深夜、人々が皆寝静まり、静かに降る雪だけが暗闇に踊る頃…。

何処からかフクロウの鳴き声が聞こえて来る。

少年の家は、森の入り口にあった。

少し広い庭はよく手入れされており、其の花壇の片隅に、季節を忘  
れた一輪の花が咲いている。

其の白いバラは、葉に雪を纏いながらも、凜として夜空に向かって

咲き誇っている。

育てた者の魂を表すが如くの穢れない白いバラ、其の清浄さに、気高さに惹かれ、誘われるがままに、

やってきた訪問者は、自らも凜と其処に佇んでいる。

ふと、手折ろうと白い指を花に伸ばすが、其の手をそのまま握り、思いとどめる。

「また今宵も、手折ることができなかった。

いったい何度この動作を繰り返したことだろう…」

その影はそう呟くと何時までも飽きる事無く佇む。

ただ、静かに其の美しさを愛でながら、背に月を重ね、言葉無くバラと語り合う。

まるで、愛し合う二人のように…。

翌日、早朝から尋ねてきたカイに、ゲルダは家の中で忙しそうにお茶の支度をしている。

カイは腕まくりをして、庭の手入れをしている。

真冬の中、熱心に作業をしている彼の綺麗な額に流れる汗が、日の光に誇らしげに輝いている。

「カイー！ ほどほどにして入ってきて！ 風邪引いちゃうから、スコーンが焼けたよー！」

「大丈夫だよー！ いいお天気だし、あと少しやってしまっよう！」

窓からその姿を見ていたゲルダは、朝から上機嫌だった。

「ふふふ、カイったら…」

でも、母さんの葬儀のあとに二人で植えたバラ、もう冬なのに、

まだ一輪ずつ咲いているなんて…。

カイの庭には白、うちの庭には赤いバラ…。どっちもカイが世話したから、あんなに長く咲くんじゃわ。

カイって本当に凄いな…。」

明るい陽射しの中、ゲルダの庭でカイは花壇の世話をしている。

ゲルダは台所でお茶の用意をしている。

庭に向けた出窓には果物籠が置かれ、カイのマフラーにくるまれた鳩がゆったりと寝ている。

よくある昼下がりの光景。

テーブルには、カイが約束どおりに持ってきた古い手編みのマフラーがきちんとたたんで置かれている。

カイが家の庭から持ってきた、赤い椿は綺麗なガラスの瓶に飾られている。

鳩は温かい日差しを全身に受け、台所から聞こえてくる嬉しそうなハミングをうっとりとして聴いていた。

幸せな時間がゆっくりと流れている。

静かに、ゆっくりと…。

「あと少しだ、既に足の感覚など消えてしまった…。

踏みしめる足より伝わる苦痛は、我が身をそのまま二つに引き裂きそうだ…。

いや、もう既に引き裂かれておるのやも…？

我が魂は昇華せんと、天へと続く階段を昇っているのではないかな…。

ふっ、戯れ言を言っている場合ではないな…。」

永遠では無いかと思われるほど長い階段を、悪魔は上り続けていた。

そして…。ようやく最後の段を踏みしめる…。

「見よ…！」

我はたどり着いたぞ！

我を拒み続けた、我が故郷よ！我を受け入れよ！

今こそ、その門を開きたまえ…！！」

高く声を上げ叫ぶ悪魔に、天の門は応えない…。

静かに、そして敵かに、悪魔の前に立ちはだかる…。

「おのれ…我をなんと心得るか…！」

見忘れたか、天の門よ！

我こそは、嘗て暁の子と呼ばれし、大天使なるぞ…！！

ええい、開けぬか…！！

開けよ！開けると申すに！」

不浄の手で門に手をかけ様とすると、門はこの邪悪なものを戒めようと、茨のツルを触手の様に自身から伸ばし猛々しく振りかざす。

「なるほど、獣と成り果てた我を愚弄し穢れと呼ぶのか…！」

茨のつる如きで我を戒めようというのか！

ええい、恨めしい、こうしてくれるわ！」

そういつて大切に抱えてきた鏡を振り上げ、神の庭の門の扉に打ちつける。何度も、何度も。

黒い獣は、血塗れちまみの足をあげ、扉を蹴り始める。

鋭い爪で門に縫すがり血の涙を流しながら掻かき毟むしる…。

扉に触れる…。

それだけで其の身は茨の鎖に巻きつかれる。

ギリギリと締め上げられながら、身体中から流れ出る血を其の口に受け

更に、内から溢れ出る血も受け、求め続ける…。

「受け入れよ！

我は戻ってきたぞ！

父よ！愛する者よ！何故その様にまで我を疎まれるのです！

一時、ほんの刹那で良いのです、今一度我が姿を見つめてくださ  
れ！

美しいと、それだけでも…！

父なる神よ！我は求め、叩いているではないか！！！！！！」

嘗て天界に明けの明星と謳われ、その身に神の愛を欲しい儘に受けていた天使、シャヘル…。

そしてその愛に疑いを持ち、地へと墮天した魔なる獣…シャヘル…。愛に飢え、愛を乞う獣は聖なる茨によって身体中から血を流し、跪き天を仰いで

声よ、愛しいあの方に届けといわんばかりに咆哮する。

そして両腕よ、せめてあの方の足先に届けと…。

だが…応えは得られず、変わらずに締め付けられ、シャヘルの骨のきしむ音

皮膚の裂ける音だけが、聖なる天の門前にボキリ、ザクリと聞こえている…。

じっと、天を仰いでいた獣は凄まじい美貌の顔を一瞬ゆがめたかと思つと、唇をかみ締める。

きつく噛まれた唇は牙に裂け、そしてまた血でその顔を濡らす…。求めていたのに、こんなにも求めているのに与えられない愛…。

僅かに残っていたであろう、再び愛される期待は、完全に打ち碎かれた……。

「もう……。我にそそがれる、慈悲など無い……か……」

そして獣は、静かに、うなり声のような声をあげながら、再び顔を上げてゆく…。

「……そうか……其れほどまでに、下界の猿が可愛いか……。  
……良いのお……妬ましいのお……。」

下界に蠢く猿共よ、我より、父を奪いし者共よ……

産めよ増やせよ、此の地表をその醜い姿で覆い尽くすがいい……。

父よ……！！！！

貴方が其れほどまでに愛する猿に、我が贈り物を進ぜよう！

受け取るがいい！！！！！！」

獣が叫ぶと茨の鎖は消し飛び、打ち捨てられていた鏡は獣の手の動きに合わせるように空へと上がって行く…。

「砕け散れ！！！！悪魔の鏡よ！！！！」

地表へと降り注ぎ、愛される者共に降り注げ！

魂を穢し、我が復讐を果たせ！

美しいものは歪み、穢れ、闇に染まり、愛を奪い返せ、穢しつくせ！！

神よ！お前の愛しい者共が、闇に落ち、穢れる様を見るがいい！  
思い知れ！神よ！！！！

いい気味だ！

いい気味だ！

わはははははははははは！」

鏡は音を立てひび割れると、欠片の一つが二つに、二つが四つに、細かき粒になるまで砕け続けた。

一瞬、空にとどまっていたが、獣の腕が振り下ろされると、そのまま小さい粒までもが

世界中へと飛び去ってゆく…。

「ゆけえええ！大きく細かく砕けるわが愛よ、其の憎しみを晴らしに行くのだああ！」

ゆつたりとまどろむ鳩は、其の体中の羽の全てが怖氣に震えるような感覚に目を開く。

咄嗟に窓から空を見上げると、何かが光ったように思えた。

戦慄する間もなく、其れは降り注ぎ、なんとということか、カイめがけて飛んでゆく。

そしてカイ自身も、空を仰いだ…。

そして、其れは起きた。

禍々しい光を放ちながら、それはカイの眼に飛び込む。

ほんの一瞬の事が、ゆつくりと唯一の目撃者たる鳩の瞳に刻まれてゆく…。



## 第1章↳嫉妬↳（後書き）

声劇用の台本に書いたものを、小説のように書き直してみました。  
拙い文章ですが、読んでいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6854s/>

---

Snow Queen 【雪の女王】

2011年10月8日22時00分発行